Ｖ－４３　本校舎　高等部

１　授業研究会について

月　日	領域教科名	単元名	対　象	指導者
6 月 21 日	総合的な学習の時間	自分を見つめ直そう	１Ｃ-２　７名	後藤、佐藤舞
7 月 24 日	総合的な学習の時間	現場実習を振り返ろう	２Ａ　３名	藤原、皆川
10 月 2 日	生活単元学習	入浴剤を作ろう	D-１　５名	吉田　他３名
10 月 23 日	総合的な学習の時間	7年後の自分を考えてみよう	１Ａ　３名	多田、浪岡
11 月 22 日	総合的な学習の時間	現場実習のふり返り	３Ａ　７名	佐藤秀、近藤
12 月 3 日	総合的な学習の時間	現場実習を振り返ろう	２Ｃ-１　７名	松川、下田

高等部では、自己有用感に関することと学年や発達段階に応じた指導に視点を置き、Ａ、Ｃ組の各学年、Ｄ組で授業研究会を行った。１年生の学習では、自分の生活をふり返ったり、将来の自分を想像してみたりすることが自己理解につながった。Ｄ組の学習では、入浴剤を作り、試作を家族に使用してもらい、評価してもらうことで、改良する意欲になった。被災地の方に直接プレゼントを渡し、喜んでもらえたことが自己有用感につながった。2，３年生の現場実習のふり返りでは、自己評価と他者評価を比較することで自分の成果と課題が明らかになった。実習先の方からほめられたことや認められたことが「うれしい」と言葉にする生徒が多かった。

それぞれの授業を見合うことで、生徒の実態が分かり、自己有用感を高めるために必要な事項や学年や実態に応じた指導についてなど様々な意見交換を行うことができた。

２　発達段階に応じた自己有用感の形成・自己有用感の向上のための支援について

（１）授業実践を通して得られた有効な支援

〇他者との関わり

・他者（友達、家族、教師等）の存在や行動、役割等に気づく場面を意識的に設定し、自分を取りまく他者への感謝に気づけるような働きかけをする。

・互いに認め合い、尊重できる場面を設定する。

・周囲から認められたという実感や誰かの助けになっていることを生徒自身が感じられるように具体的に伝える。

・人との関わりの中で関係が良くなる体験を積み重ねる。（良い集団作り。学級作り。認め合える、課題を指摘し合い、それを受け入れられる気持ち作り）

〇自主性の向上

・身近な内容を設定し、自分でできることを実践→評価→ふり返りをくり返し行う。

・自分の役割が他者のためにもなることに気づかせる場面を設定する。

・生徒の考えや気持ちを引き出しながら自発的行動、発言を促すための授業を行う。

・努力すれば達成できる課題に取り組ませ、意図的にできる場面を作る。

〇意欲

・身近な題材、興味のある内容や実態に応じた教材教具などを工夫する。

・考えの引き出し、具体化、選択肢の提示、雰囲気作り等をする。

・日常生活の中でできそうなことを頼み「ありがとう」や「助かったよ」など声がけをして自分が役に立っていることに気づくよう、わかりやすく伝える。

〇コミュニケーション

・自分の様々な気持ちや感想を自分の言葉で話す場面と書く場面を設定する。

〇自己理解

・自己評価、他者からの評価（家族、実習先）を活用する。

・マイナス評価への適切な対応をする。

・自分の活動を振り返り、成果と課題などについて具体的に伝える。

※　網掛けは高等部キャリア教育目標と関わりのある部分

（２）まとめ

高等部のキャリア教育目標は、「社会生活能力の確立と自己選択、決定能力の育成」である。教科等の学習に加え、自己を理解することや他者との関わりの中で豊かな人間性を養い、自己実現、進路実現に向けて職業観や働く態度を身につけ、自己選択、自己決定していくための学習に取り組んでいる。

今回の研究の結果、自己有用感の形成・向上に有効な支援として「他者との関わり」「自主性の向上」「意欲」「コミュニケーション」「自己理解」について挙げられ、キャリア教育項目の豊かな人間性、職業観・勤労観に関わる部分へ多くの支援内容が確認された。中でも「他者との関わり」では、学年が進むにつれて自分の身近な人から実習先の方などへと人間関係が広がった。また、様々な関わりから自分を理解し肯定すること、相手を理解すること、相手に喜んでもらうこと、お互いを認め合うこと、尊重し合うことなどが自己有用感の向上に大きく関係していた。

自己有用感の向上のための支援として、具体的には（１）の内容であるが、教師が意識して、意図的な発問をすること、感謝の気持ちや相手に認められたことを生徒にわかりやすく伝えること、生徒自身が他者を受け入れ、認め、理解できる場面を設定することなどが必要である。

高等部は、社会への出口であり、高校生という多感な時期である。自己を理解し自己肯定感の上に他者理解、尊重、感謝の気持ちが養われ、自己有用感を形成し向上することで、安定した学校生活を送ることができ、卒業後の社会生活がより豊かになると考える。しかし、様々な障がいの特性により自己理解や自己肯定が未熟で、他者との関係をうまく築けず、年齢と精神面のアンバランスがある生徒へ、自己有用感をどのように育み、どのように支援をしていくかが今後の課題である。